

紙芝居第1稿

- 「つくろう！素敵な越谷」
 - 「いい街にしよう！越谷」
- 『参加』と『協働』で自治、始めます

1. 「わー、越谷って意外に都会なんだ」と南越谷駅前に迎えにきた祖父の神田裕次郎に南田アイは言いました。「そうだなあ、6万人が乗り降りする駅になってしまったね。10年前は貨物列車ばかり通る鉄道だったが、いまじゃ『越谷レイクタウン』という新駅ができるほどだからね。東武線の新越谷駅との乗り換えも雨にぬれることなくできるようになったね。」
大学に入学するために祖父の家で暮らすことになったアイは、さっそく大学に自転車で通学することにしました。

2. 越谷市は日光街道の宿場町として発展してきましたが、地下鉄日比谷線が東武伊勢崎線に乗り入れた昭和37年ごろから飛躍的に人口が増え、東京のベッドタウンとして、ついに32万人の街になりました。今年が町から市になって50年だそうです。街のほぼ中央を南北に東武伊勢崎線が走り、中心市街地は駅周辺から発達しました。近年は駅前マンションが増えています。銀座から1時間で来られる北越谷駅は駅前マンションの北限地だそうです。しかも、駅から1、2キロ離れれば田畑があつて緑も残っています。川が5つも流れていて、都市に残る自然空間となっています。市役所辺りを流れる元荒川べりでは四季の折々の花が楽しめます。しかし、標高5メートルの低地がほとんどで、関東平野の窪みのような地形で熱気がたまりやすく、また川筋を通過して首都圏の熱気がおしよせ、夏には40度になった日もありました。

3. 「おじいちゃん、越谷の名物は何なの？」とサイクリングをする前に聞いてみました。「いろいろあるが、私は南越谷の阿波踊りをあげたいね。23年前にある企業が始めた阿波踊りが57万人もの人を集める大イベントになったんだよ。」

「私は宮内庁の鴨場ね。市民に開放される期間は短いけれど、中は伝統を感じさせるし、手づかずの自然って感じだわ」とおばあちゃんの幾さん。伝統的なお祭りがあちこちに残っていて、3年に1回行われる久伊豆神社の例大祭は盛大で、台もの歴史ある出車ができるそうです。

「でも、将来は人造湖のレイクタウンが名物になるかも。日本一の売り場面積を持つスーパーももうじきできるし」とおじいちゃん。ここ10年間になんでも2万人がレイクタウン地区に住むようになるんだとか。

「大袋にも区画整理がなされて新住民が入ってくるしね。まだまだ越谷は若々しい街なんだよ」と言っていました。

4. 今日は朝からおじいちゃんは南越谷コミュニティ推進協議会が主催するフェスティバルに役員として出かけました。越谷には自治会のほかに地域のPTAやスポーツ少年団、子ども会、青少年育成協議会などの地域に根付いた団体が結成したコミュニティ推進協議会が13あり、地域活動を行っているとか。南越谷地区では防災ウオークや音楽会、バザーやなどのイベントに大勢の人が参加します。これは文部科学省からも表彰されたとか。また、市内にはさまざまなテーマで社会貢献活動をする市民団体が150近くあり、これも活発な活動をしているそうです。障害者団体でボランティアをしているおばあちゃんは「東武伊勢崎線は全国でもバリアフリー化が進んだ鉄道なのよ。でも、それには何年も継続的に行われた障害者団体のバリアフリー調査が貢献したのよ」と言っていました。

6. 南越谷から大学のある北越谷駅に着きました。駅前西口の商店街は電線も地中化されていてなかなかきれいです。ケーキ屋さんに入ったら、なにやら写真が飾ってありました。ケーキ屋さ

んのおばさんが「素敵な写真でしょ。近くの大学の学生さんたちが、「まちかどを美術館に」という活動をしていてその一つなのよ」とニコニコしながら言いました。きっと私の先輩たちだと思ってうれしくなりました。

その角を曲がると今度は「地場野菜」と幟をたてたお店が。聞いてみると、主婦たちが地元の農業を活発にするために地元農家から野菜を仕入れて売っているんだとか。大学に行くために出津橋を渡ったたら、川の清掃をよびかける市民団体のポスターがはってありました。なんだか越谷って元気な人たちがいっぱいいるなあって感じました。

7. 大学に行って「まちかどを美術館に」という活動をしている先輩にいろいろ話を聞きました。彼女は今、「越谷市自治基本条例審議会」の委員をしているそうです。「えつー学生で」とびっくりしましたが、公募制だったので応募したら選ばれたそうです。

「自治基本条例ってなんですか」と聞くと「一言でいうと『越谷市の憲法』かな。「自治」の基本理念や基本原則を定めたものよ。ほうら、10年ぐらい前から次々の法律ができて「地方自治の時代がやってきた」なんて言われるようになったけれど、その実体化の一つと言えるわね。でも、アイさん、「地方自治」とか「地方分権」が大切なのはなぜだと思う？」

8. 「うーん、よくわからないけれど、夕張市みたいに「倒産」する自治体が現れたでしょう？それが関係しているのかな。」「そうね、国からもらう税金、つまり「地方交付税」に頼ってばかりいたら、国が出さなくなったら倒産してしまうよね。越谷市だって平成12年に90億円の地方交付税をもらっていたけれど、19年度は12億円になっているの。将来的にはゼロになる予定ですって。もちろん、国税で徴収されていた一定の部分が市民税として徴収されるようになっているけれど、自治体からみると十分ではないという声が多いの」

「国と地方の赤字を合わせると1083兆円で、国民一人当たり848万円なのよ。今後も国からの税金はあてにできないから、自治体がなんとかしなくてはならないっていう時代なのよね。じゃあ、それ以外の理由は？」

9. 「うーん、後期高齢者医療制度が取りざたされていますよね。うちのお祖父ちゃんやおばあちゃんは元気だけれど、高齢化が越谷でも進んだらやっぱり、越谷でも何か不都合なことが起こるんじゃないかしら？」

「そうね、少子高齢化社会が進むと子育て支援や高齢者問題をどう地域で解決していくかが問われるね。福祉、教育、医療分野はもともと自治体が担ってきたけれど一層、その行政運営が問われるってわけよね。」

「そうかこれからは自治を上手におこなって活発な地域社会を作り上げる自治体と、そうでない自治体が出てくるんだ」

「でも、それは行政の責任だけじゃあないよね。行政のトップである市長は市民が選んでいるし、それをチェックする議員も市民が選んでいる。市民の役割が増してくるわけよね。ただ、市民は選んだからあなたしっかりやってね、とおまかせにするだけでなく自分でも動かなくては街は良くなるよ。それがしだいにわかってきたのね。」

だから、これまで作られた自治基本条例の中には必ず「参加」と「協働」が入っているわね。」

10. 「『参加』と『協働』って、よく聞く言葉だけれど、実際はどういうことなんでしょう。」とアイ。

「たとえば、『参加』だけどゴミの分別を行政がこう決めましたから、皆さんお願いします。というのではなく、決める前の段階から市民の意見を聞いてルールを作るとか、バリアフリーの広場づくりをすとしたら、設計後ではなく設計前に市民の意見を聞いたりすることをさせているわね。それには行政の情報公開が前提になるわね。」

『協働』はもう一歩進んだ段階といえるわね。もちろん、これもいろいろな段階があるけれど例として高齢者がおしゃべりをしたり情報交換をするサロンを地域にいっぱい作っていきたい

と市民が思った場合、行政は人手がないとするわね。そうしたら市民が人材を提供し、市が場所や経費を提供すれば実現できるわね。これは『協働』と呼べると思うわ。つまり、市民から見れば『参加』と『協働』で自分たちの望む地域社会をつくることができる。つまり、「自治」を推進できるってということなのよ。でも、『参加』も『協働』もいろいろな段階があるので、このテーマだけで別の条例を創っている市が多いわね。」

1 1. 「そうなんだ。背景には国や地方の財政難と少子高齢社会があるってことですね。」

「うーん、それにもう一つ重大な背景があるの」と先輩は顔をしかめました。

「地域の連帯や助け合いが薄れてきたことがあるの。つまり、コミュニティがうまく働かなくなったのでは、という危機感よね。高度情報社会で世界中の情報が取れるようになったけれど、隣の人の職業は知らない。家族が何人いるのかも知らない。なんてことはないかしら。」

「そうですね。」

「だから、そうした弱くなったコミュニティの力を復活させたい、という思いも自治基本条例の中に入れてくると思うわ。」

「一方、それではいけないと自主的に社会活動に取り組む市民団体がNPO法人格をとって、全国で3万を越しているわね。市民団体が公的な仕事を担える仕組みができてきたのね。介護保険事業や障害者の福祉サービス、ニートの若者支援など税金を財源に活動するNPO法人も増えてきて、これをNPOの人たちは単なる委託事業ではなくて、『協働』だと位置づけているわ。」と先輩。

「それにおじいちゃんのように地域でがんばっている団体もいますよね」

「それに加えて、夕張みたいになったら大変だから行政改革も必要なの。市民も行政も議会も、みんなで手を取り合って、行動していかななくてはならないのよ。まさにその最初のルールを表すのが自治基本条例なのよ。今、越谷はまちをつくっていくターニングポイントの時期なんですよ。だから、みんなで一緒に考えていきたいと思って、委員に応募したわけ」

1 2 先輩の熱い情熱に触れて、なぜ、今、自治基本条例づくりか、納得したアイでした。大学をでたアイは、桜並木と蛇行する元荒川が一望できる出津橋で立ち止まりました。大きな夕陽が今日一日の最後の光を赤々と放っていました。

「結構、いい街にしていけるかもしれない、越谷は」とアイはつぶやいていました。

